

TOKYO2020 の研修ノートから

東京五輪・パラリンピックの年が明けました。関係部門の取り組みも最終段階に入り、人々の意識も次第に盛り上がってきています。私は大会ボランティア（メディア部門）の一員として研修が始まっているところです。読者の皆さんの本番前の予習に役立つことがあれば、との思いでその一端をご紹介しますと思います。



まさにネットの時代ですね。研修は一つの会場に集まったの全体研修のほかに「Eラーニング」と呼ばれる個別研修があります。これまでに自分のパソコンにメールで2回教材が送られてきました。私の場合その要点を自分のノートに書き出しているところです。以下は其中で一般の方にも参考となると思われる点を記し

たものです。すでに知っている方もいらっしゃると思いますが・・・

- 五輪のカラー： 青、黄、黒、緑、赤 の5色。これらの色でほぼ全ての国の国旗を描くことができる。五つの輪は五大洲を表わし、それが組み合わさっているのは団結の象徴。「スポーツの祭典」は「平和の祭典」とも呼ばれている。
- 1896年 第1回のアテネ開催の時は14カ国241人、8競技で実施された。スポーツを通じ平和な世界の実現を目指したピエール・ド・クーベルタン男爵は近代オリンピックの父と言われている。（日本のオリンピックの父は嘉納治五郎）
1940年 日本（東京）での開催は日中戦争でキャンセルとなった。
1964年 東京大会では93カ国・地域から5151人が参加した。
現在、参加国は206カ国・地域に広がっている。国ではなく都市で開催される。
- パラリンピックの大会旗はラテン語で「スリー・アギトス」と呼ばれ「私は動く」との意味があり、限界に挑戦するパラリンピアンを象徴している。赤、青、緑の3色は世界の国旗で最も使われている色。
- 1960年 第1回のローマ大会では23カ国400人が参加した。車椅子バスケット、水泳など8競技。日本は不参加。
1964年 第2回が東京大会となった。21カ国378人が9競技に参加。当時、リハビリにスポーツは考えられなかった。やがて「パラリンピック」が正式名称となり、障害の度合いに合わせてクラス分け制度が用いられるようになった。



ボランティアスタッフへの励みともなる言葉

- ◇ 「私は輝く」——楽しむ、変わる、世界を変える。人と会う楽しみ、人を笑顔にする楽しみ、やり遂げる楽しみ。一生に一度のTOKYO2020を全力で楽しみましょう。
- ◇ スケールが大きなグローバルな環境に身を置く。「世界がここに集まっている」といった感覚。「ありがとう」が何よりの喜び。
- ◇ 世界中からもボランティアが参加する。ボランティアは選手と一緒にその国の代表。ユニフォームには不思議な力がある。「2020年のオリンピックのボランティアをやった」はすごい財産になる。将来にわたって続く友情・・・

——その都度ご紹介していきます——